

リカードの絶対価値論について

——「絶対価値と交換価値」（一八二三年）を中心として——

松 田 弘 三

一

ダヴィッド・リカード (David Ricardo) が「古典経済学の完成者」(K. Marx, Kritik der Politischen Ökonomie Besorgt vom M.E.I.-Institute. S. 49) と評価されているのは、いうまでもなく、彼が「労働時間による商品の価値の規定」を「もつとも純粋に定式化しかつ展開した」(a. a. O., SS. 48-9)、すなわち、ブルジョア的限界内において労働価値説を極限まで発展させ、そのうえに、これを原理とする経済学体系を樹立したからである。このことは、『経済学および課税の原理』(Principles of Political Economy and Taxation, 1st. ed. 1817) によつて、充分あきらかであるが、なかんずく価値論については、彼はとくに第三版（一八二一年）において重要な増補改訂を加えたばかりでなく、死（一八二三年九月一二日）にいたるまで考究をつづけ、その完成に努力したのであ

る。

一九四三年七月に発見された 'Mill-Ricardo papers' のなかにふくまれ、スラッフア編『リカード全集』(The Works and Correspondence of David Ricardo, ed. by P. Sraffa, with the collaboration of M. H. Dobb, in 10 vols., Cambridge University Press, 1951-55) 第四卷 (Vol. IV, 1951) にほじめて公表された遺稿「絶対価値と交換価値」(Absolute Value and Exchangeable Value, 1823)⁽¹⁾ は、このリカードの晩年における価値論の発展を知るための最も貴重な資料である。以下この論文におけるリカードの絶対価値の概念をさぐるするのであるが、まず若干の予備的考察をしておきたい。

- (1) この遺稿の後半部をなす Later Version については、玉野井芳郎氏の翻譯(「デーヴィッド・リカードウ、絶対価値と交換価値」[最終稿——未完]、堀経夫博士選歴記念論文集『古典浦経済学の研究』一九五六年、所収)があり、前半部たる Rough Draft の約三分の二の部分については、緒田原清一氏の翻譯(「リカードオの絶対価値と交換価値(1)」、『上智経済論集』1956, Vol. III, No. 1.)がある。

周知のように、リカードが『原理』において、その価値論の対象としたものは交換価値であった。彼はいう。「わたしが読者の注意をひこうとする研究は、商品の相対価値 (relative value) の変動の結果にかんするものであつて、その絶対価値 (absolute value) のそれにかんするものではない。」(Works, Vol. I, p. 21) ことに「相対価値」とは、いふまでもなく交換価値のことであつて、それはまた「比較価値」(comparative value)ともよばれている。それでは、彼が「絶対価値」あるいは「眞実価値」(real value) もしくは「積極的価値」(positive value) と名づけているものはなんであろうか。

リカードの絶対価値論について(松田)

リカードが、この絶対価値の問題をとくに考察の対象とするようになったのは、一八二二年以降のことである。同年五月に刊行された『原理』の第三版においては、第一章のうち価値修正論についての第四、五節が全面的に書き改められ、不変の価値尺度についての第六節が追加された——不変の価値尺度の問題が、リカードにおいて絶対価値の問題といかに密接に関連しているかは、のちにみるところである——ばかりでなく、第二〇章「価値の富、両者の特性」の増補部分のうちに、絶対価値のかなり明確な規定がみいだされる。すなわち、「フランは、フランとはかられるべき物とが、双方に共通なある他の尺度に還元されうるばあいのほかは、フランがつくられているおなじ金属以外のなものにたいしても、価値の尺度ではない。このことはなされうるとわたしはおもうが、それはこれらとともに労働の結果であるからであり、したがって労働はそれによって、その相対価値と同様に、その真実価値が評価されうる共通の尺度である。」(Ibid., p. 284)と。

第三版の公刊から二ヵ月後に、リカードはトラウワーにあてて書いている。「わたしは、一商品につきやされた労働がその商品の交換価値の尺度だといっているのではなく、その積極的価値の尺度だといっているのです。そのうえでわたしはこうつけ加えます。交換価値は積極的価値によって規制されるから、それはついやされた労働量によって規制される」と。(4 July 1821, Works, Vol. II, pp. 1-2) さらに一ヵ月後に彼は書いています。

「交換価値について論ずるさいに、あなたは真実価値の観念をすこしも念頭においていられないが、わたしはつねにそれを念頭においています。……一つの商品の交換価値は、その真実価値が変化するか、またはそれと交換される物の真実価値が変化するか、いずれかでないかぎり、変化しないと、わたしは思います。」(22 Oct. 1821, ibid., p. 38)と。

以上の引用によつて、リカードにおける絶対価値の意義はほぼあきらかであろう。彼によれば、商品の絶対価値はその交換価値を規制するのであり、しかもそれは商品に対象化された労働量に還元されるのである。かくして、絶対価値は交換価値の本質としての価値にほかならないが、リカードにおいては価値を形成する労働の質は顧慮されず、ただその量だけが問題にされているのであるから、それはむしろ価値の大きさであるというべきであらう。(森耕二郎『リカード価値論の研究』二二七ページ参照)

商品の価値をそれに対象化された労働量によつて規定するこの見解は、約一カ月後のマルサスあての手紙にものべられている。「わたしにとつては、貨幣をもつてはかつた諸商品の騰落ほど重要でないものではありません。われわれが注意をむけるべき重要な研究は、穀物・労働および諸商品の眞実価値の騰落、いいかえれば穀物を栽培し、商品を製造するのに必要な労働の分量の増減です。」(28 Sept. 1821, *ibid.*, p. 83) 同一の思想は、一八二三年八月には、おなじマルサスにあてて、いつそう明確につげられている。「わたしは、ある商品に投じられた (*worked up*) 労働量によつて、その価値を評価します。……われわれ二人のあいだの相違は、これです。あなたは、ある商品は、多量の労働を支配するがゆえに、高価であると主張していられます。わたしはある商品は、その生産に多量の労働がいやざれているときにのみ、高価であると主張します。」(15 Aug. 1823, *ibid.*, p. 348) 労働量による価値規定のこの思想は、リカードの最後の論文「絶対価値と交換価値」においても貫徹されている。いなむしろこの論文こそ、リカードの絶対価値概念の最終的な発展形態をしめすものであるといえよう。まず、スラッフアの *Note* によつて、この論文の成立の由来からみてゆくことにしよう。

一八二三年四月に出版されたマルサスの『価値尺度論』(The Measure of Value stated and illustrated) —

それは支配労働量を価値の標準尺度であると主張していた——との意見の不一致に刺戟されて、リカードはマルサスと手紙で論争し（とくに四月二九日づけおよび五月二八日づけの手紙）、この論争はのちに他の友人たちにもおよんだ。マカロックが五月から六月にかけてロンドンを訪問したあいだ、彼はリカードのサークルにおけるこの問題の討議に参加した。この話しあいののち、リカードはマルサスにあててつぎのように書きおくっている。「マカロックとわたしとは、別れるまえに価値の問題を解決しはしませんでした——それは一回の対談で解決するにはあまりにもむづかしいものです。」これにつけ加えて彼は、休暇中に「それについてよく考えてみることを約束したとのべている。」(Ibid., p. 330)

リカードの再考の成果であるこの論文は、完結した *Rough Draft* と未完成の *Later Version* からなっており、前者は八月の第二週以後に書かれ、後者は八月末から九月五日までのあいだに書かれたものである。草稿は、価値尺度の問題にかんする彼自身の見解をのべたほか、マルサス、マカロック、ミル、トレンズが主張した尺度の批判をふくんでいる。そして最終稿においては、マルサスとマカロックの主張した尺度についてだけ討論している。リカード自身は、彼の結果についてあきらかに不満足を感じていた。九月五日のミルにあてた最後の手紙のなかで、彼は、「最近この問題について充分考えたが、大した進歩がなかった。」(Ibid., p. 387) ことを告白している。しかし——スラッフアによれば——「この論文は、時々のヒントや暗示として、リカードの著作のなかにこれまで存在していた一つの観念を発展させているので、重要である。その観念とは、交換価値あるいは相対価値の基礎によこたわり、それと対照されるところの、**眞実価値の概念である。**」(Works, Vol. IV, p. 359)

いは不変の尺度ではないであろう。なぜなら、わたしがすでに説明しようとしてきたように、貨幣を生産するに必要なであろうところの固定資本と、その価値の変動をわれわれがたしかめようとする商品を生産するに必要な固定資本との割合が異なるために、貨幣は賃金の騰落による相対的変動をこうむるのである。また貨幣は、その生産にもちいられる固定資本と、それと比較さるべき商品の生産にもちいられる固定資本との耐久性の程度が異なるために、——あるいは一方を市場にもたすに必要な時間が、その変動を測定しようとする他の商品を市場にもたすに必要な時間よりも、より長くまたはより短いために、賃金の騰落というおなじ原因によつて変動をこうむるであろう。すべてこれらの事情は、考えうるいかなる商品にも、完全に正確な価値の尺度たる資格を失わせるのである。」（Works, Vol. I, pp. 43-44）と。

これはもとより、「固定資本の耐久性に差異があること、および流動資本と固定資本との組合わされる割合に相違があることは、商品の生産に必要な労働量の多少ということ以外に、その相対価値を変動させる他の原因をひきいれる。——この原因は、労働の価値における騰落である。」（Ibid. p. 30）という、第一章第四、五節に展開された価値修正論の立場からの立論である。そこで、賃金の騰落にもなつて商品の交換価値が変動すると考えられたのは、つぎの四つのばあいにおいてであった。(一)、固定資本と流動資本との割合が相違するばあい。(二)、固定資本の耐久性が相違するばあい。(三)、「一組の商品が市場にもたらされるまでに経過しなければならぬ時間」(Ibid. p. 34) が相違するばあい、すなわち、「商品が本来の流通過程にはいりこみうるまえに労働過程に服したままである期間の差異。」(K-Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II, 1, S. 21) (四)「資本が、その使用者に回収される速度」(Ricardo, *ibid.* p. 38) が相違するばあい、すなわち、「生産過程の継続中における労働過

程の中断の結果生じる流動資本の回転時間の差異。」(Marx, a. a. O., S. 20) もつとも、リカードの説明はきわめて混乱しており、第一のばあいの例証としてあげられたものが、固定資本特有の価値の流通様式の契機を無視した結果、労働過程の長短にともなう資本の大小の問題に転化して、第三のばあいの例証とまったく一致してしまったり、第二の固定資本の耐久性の差異については例証がなされず、第四の資本の回収される速度の差異にいたっては、第五節の表題にかかげられただけでまったく説明されていないという状態である。

だがここでリカードが問題にしているのは、つぎのような事実である。(一)、等しい大きさの資本は、もしその有機的構成、すなわち不変資本と可変資本との比率が相違するならば、価値の等しくない商品を生産し、したがって等しくない剰余価値をうむ。なぜなら、価値は労働時間によって決定され、資本の実現する労働時間はその絶対的大きさによつてきまるのではなく、その可変資本部分の大きさによつてきまるのだから。(二)、等しい大きさの資本が等しい価値を生産するばあいにも、等しい大きさの資本が一定の期間にもたらすところの剰余価値の量は、その資本の生産時間と流通時間、すなわちその回転時間の長さによつて、異なる。(三)、しかるに資本制生産においては、等しい大きさの資本は等しい利潤をうけとる。すなわち、平均利潤率の法則が存在する。相異なる利潤率は、競争によつて均等化され、それにともなつて価値は生産価格に転化される。しかるにリカードにおいては、平均利潤率は自明のことからとして前提されており、価値と生産価格とは同一視されている。「商品価値の単純な決定から、いかにしてその剰余価値、利潤、さらにすすんでは一般的利潤率がでてくるかは、リカードにはついにはつきりしなかつた。」のであり、そのために彼は、「生産価格が価値と異なることを価値決定そのものから展開することをしないで、労働時間から独立な影響力が価値そのものを決定することをみとめて、価

値の法則をとぎとして廃棄する。」（Marx, a. a. O., SS. 36-38）すなわち、その価値論を修正するにいたつたのである。

ところで不変の価値尺度の議論において問題にされるような価値尺度は、労働量・労働時間が価値の内在的尺度であるのたいして、その外在的尺度、すなわち価値の一般的表現形態である。このような価値の外在的尺度たる商品は——マルクスがいつているように——、「その価値が不変であることを必要としない。それはむしろ可変でなければならぬ。というのは、価値の尺度それ自身が商品であり、また商品でなければならぬからである。もしそうでなければ、他の諸商品との共通の内在的尺度は存在しないであろう。もし貨幣の価値が変化するとすれば、それは他のいつさいの商品にたいして一樣に変化する。それゆえに諸商品の相対価値は、貨幣の価値がいぜんとして不変であるばあいと同様に、貨幣において正しく表現される。かくして、『不変の価値尺度』を発見しようとする問題はかたづいた。」（Marx, Theorien, Bd. III, S. 157）のである。

しかるにリカードが彼自身存在せぬことをよく知っているところの不変の価値尺度を追求するのは、なぜであろうか。それは、それが彼の本来の主題たる絶対価値の探究と密接に関連しているからである。「絶対価値と交換価値」の最終稿における彼自身のことばでいえば、「もしわれわれが、それ自身価値において増加も減少もするおそれのない完全な価値尺度をもつたならば、われわれはそれをもちいて、他物における比例的変動も真実の変動もたしかめることができるであろうし、また測定される商品における変動の原因を、それによつて変動が測定されるところの商品それ自身にけつして帰せしめはしないであろう。たとえば、……一オンスの金が二ヤードの羅紗と交換され、そしてその後三ヤードの羅紗と交換されるというばあいにも、もし金が完全な価値の尺度で

あるならば、われわれは、金がより多くの羅紗と交換されるからして金の価値が増大した、といわないで、羅紗がより少い金と交換されるからして羅紗の価値が下落した、というであろう。また、金が他の諸商品のあらゆる変動からまぬがれないばあいには、もしわれわれが価値尺度を完全な価値尺度たらしめる諸法則を知ったならば、われわれは、ある他の商品——すなわちその商品において十分な尺度の諸条件がすべて存し、かつそれによつて他物の外見上の変動を訂正し、かくて、**真実価値**において変動したのは金であるか羅紗であるかまたは両者であるかをたしかめることのできるような商品——をさだめるか、それとも、そうした商品がなければ、**価値**に作用することをわれわれがあらかじめたしかめておいたところの諸原因の効果を斟酌することによつて、**選んだ尺度**を訂正するか、するであろう。」(Works, Vol. IV, pp. 399-400)

要するに、——ミークの説明を借りれば——「**絶対価値**の概念の形式的根拠は、二商品の**相対価値**における変化が、別々に考察されたそれらの一方または双方の『**絶対**』(または『**真実**』) **価値**におこつた変化の**純結果**と有効にみなされうるといふ推定にある。商品の『**絶対**』**価値**は、広い意味においては、**事実**『**不変**』の**尺度**ではかられたその**価値**である。」(R. L. Meek, Studies in The Labour Theory of Value, p. 111)

しかし右の説明はもとより、リカードの立場からの発言とおもわれる。実は、リカードが**絶対価値**の概念を問題としながらも——いいかえれば**交換価値**の本質としての商品**価値**を対象としてとりあげながらも——、ついに**価値**の**実体**を的確に把握しえなかつたところにこそ、このような混乱を生じた原因があつたのである。彼は商品**の交換価値**、さらには**価値**が、その商品の生産に要した**労働量**によつて決定されるということだけをあつて、この『**労働**』の**性質**を、すなわち**具体的なそれとは異なる**ところのその**抽象的・一般的な性質**を、ついに理

解することができなかったのである。したがって、つぎのマルクスの指摘は、まことにことの真相を看破したものとすべきであろう。「かくして『不変の価値尺度』の問題は、事実上、価値の概念・性質それ自体の探究の、あやまった表現にすぎない。」(Marx, *Theorien*, Bd. III, S. 159)

三

さて、「絶対価値と交換価値」にたちもどつて、⁽²⁾リカードのいうところをきこう。

(2) *Rough Draft* と *Later Version* とのうち、前者は内容的により豊富ではあるが、文体も構成も粗雑であり、後者がいっそう整備されたものであるから、ここでは最終稿を中心とし、草稿から必要な箇所を補いながら、考察をすすめてゆく。

まずリカードは、商品の価値尺度が、人間労働であることを、一応承認する。「われわれの価値尺度においては、わたしが注意した他の尺度〔長さ、重さ、時間の尺度〕のばあいとおなじように、誤謬や偏倚を訂正するうえに照しあわせることのできる自然の標準がかならずあり、そしてこのような標準は人間の労働のなかにみいだされうる、といわれてきた。千人のまたは一万人の平均的力は、つねにほぼ同一であると主張されている。そうだとすると、なぜ人間の労働力を価値の単位または標準尺度としないのか。もしわれわれが、その生産に同一量の労働をつねに必要とするいずれかの商品をもっているならば、その商品は価値が不変 (uniform) であるに相違なく、他のすべてのものの価値を測定する資格が立派にある。またわれわれが、そのような商品をもっていないとしても、われわれにはなお他物の絶対価値を正確に測定する手段がないわけではない。というのは、われわれの尺度を正しくし、それを生産するのに必要な労働量の多少を斟酌することによつて、われわれは、その価

値を測定しようとおもうあらゆる商品を、誤りのない不変の標準に照らしあわせる手段をつねにもっているからである。もしこうした検査が採用されるならば、あらゆる商品はその生産に要する労働量に応じて価値をもつだろう、といわれてきた。」(Works, Vol. IV, pp. 401-2)

たとえば、「もしある分量の小蝦が一〇人の労働を一日必要とし、ある分量の羅紗が一〇人の労働を一年間必要とし、ある分量の葡萄酒が一〇人の労働の充用を二年間必要としたならば、羅紗の価値は小蝦の価値の三六五倍となり、葡萄酒の価値は羅紗の価値の二倍となるであろう、といわれてきた。」(Ibid., p. 402)

「これまで提案されたすべての標準のうちで、これが最良のものであるようにみえるが、しかし完全な標準とはとうていいいがたい。まず第一に、仮定された事情のもとで生産された羅紗が小蝦の価値の正確に三六五倍であるだろうというのは、真実ではない。なぜなら、そのような価値にくわえて、もし利潤が一〇パーセントだとすると、商品が市場にもたらされるまでに前払のおこなわれた期間にたいするものとして、一〇パーセントが全前払につけ加えられねばならないからである。葡萄酒は羅紗の価値のたんに二倍であろうというのも、真実ではないであろう。それはもつと大きいであろう。というのは、織物業者はただ一年間の利潤をうける資格があるだろうが、葡萄酒商人は二年間の利潤をうける資格があるだろうからである。第二に、もし利潤が一〇パーセントから五パーセントに下落するならば、葡萄酒の価値、羅紗の価値、小蝦の価値のあいだの比率は、たとえこれらの商品をそれぞれ生産するのに必要な労働量にはなんの変化も生じなくても、これに応じて変動するであろう。」(Ibid., pp. 402-3)

「いまやわれわれは、これらの諸商品のうちいずれをわれわれの標準として選ぶべきであろうか。……もし

われわれが羅紗を選ぶならば、利潤が五パーセントに下落したときに小蝦は価値において騰貴するだろうし、葡萄酒は下落するであろう。もしわれわれが葡萄酒を選ぶならば、小蝦はきわめていちじるしく騰貴するだろうし、羅紗はわずかに騰貴するであろう。またわれわれが小蝦を選ぶならば、葡萄酒も羅紗もいちじるしく下落するだろうが、葡萄酒は羅紗よりもいつそう下落するであろう。」(Ibid., p. 403)

(3) 「草蓐」にも、「前貸とみとめられるほどの前貸もない長時間の労働の結果である」ところの小蝦と、「労働だけの結果ではなく、完成品が市場にもたらされるのに多分一年間必要とされる前貸の結果でもある」ところの羅紗と、「労働と前貸の双方の結果であるが、前貸は羅紗のばあいよりも非常に長い期間を要している」ところの葡萄酒という、同様の例がみられる。そして、これらの商品はそれぞれ、「それとおなじ条件のもとで生産されるもの」にたいしては「すぐれた価値尺度となるであろう」が、異なった条件のもとで生産される商品にたいしては「非常に不正確な尺度であろう。」「労働が騰貴するにつれて」、「小蝦の一定量はより多くの羅紗」および「より多くの葡萄酒」と交換されるであろう。」と説明されている。(Ibid., pp. 368—70)

リカードはつづけていう。「もしすべての商品がぜんぜん前払なしに、労働のみによって生産されて、一日のうち市場にもたらされるとすると、なるほどわれわれは不変の (uniform) 価値尺度をもつであろう。そしてそれを生産するのに同一量の労働をつねに必要とする商品は、一フィートが長さの完全な尺度であったり、ポンドが重さの完全な尺度であったりするように、完全な価値尺度であろう。あるいは、もしすべての商品が一年間それらに使用された労働によって生産されるとすると、同一量の労働をつねに必要とする商品はまた完全な尺度であろう。あるいはまた、諸商品がすべて二年間に生産されるとすると、おなじことがひとしくいえるであろう。

う。」(Ibid., pp. 403-4)

「しかし諸商品が市場にもたらされる時間にかんするかぎりでは、それらはもつとも多様な諸事情のもとで生産される一方、それらは、それらの生産に必要な労働量の多少によつてのみ変動するものではなくて、労働が豊富か稀少かにしたがつて、または労働者の必需品が生産上により困難となるにしたがつて、労働者に支払われるであろう完成商品の割合がより大きいかより小さいかによつても、変動するのである。そしてこの割合こそが利潤の変動の唯一の原因なのである。(4) 一日に労働のみによつて生産される商品は、利潤の変動によつてはほとんど影響されない。また一年間に生産される商品は、二年間に生産される商品よりも利潤の変動によつてより少く影響されるのである。」(Ibid., p. 404)

(4) この見解はいうまでもなく、賃金の騰落を商品の価値を規制する第二の要因と考へるリカードの価値修正論のあらわれであるが、その基礎には、利潤の本質にかんするあまりにも資本家的な観念がよこたわつてゐる。「草稿」において彼はいう。「もしすべての商品が一日だけ使われた労働によつてつくられるならば、労働者が働きはじめると、各労働者が所有しているもの以上に使用される資本はないから、利潤というようなものは存在しないであろう。……しかし一年または二年の経過のうちに市場にもたらされる商品にかんしては、実際に共同所有者である二つの階級の人びとがある。一つの階級は商品の生産を助けるために、その労働だけを提供する。そして報酬をうける権利のある労働の価値にたいしては、支払われねばならない。他の階級は、資本のかたちで必要とされる前貸を提供する。そしておなじ源から報酬をうけとらねばならない。ひとりの人が一年間働くまえには、彼のために食糧や衣服およびその他の生活必需品の貯えが準備されておらねばならない。この貯えは彼の財産ではなく、彼に仕事をはじめさせるひとの財産である。完成商品から両階級の人びとはともに、実際に支払をうける。労働者を働かせるようにし、そして彼の賃金を前貸した雇主は、利潤をつけ加えてこれらの

賃金を回収しなければならぬ。そうでなければ、雇主は労働者を雇う動機をもたないであろう。そして労働者は、彼にあらわれている食糧・衣服や生活必需品によってつくられるか、あるいはおなじことであるが、彼がそれを買うような賃金によってつくられる。それゆえ雇主の利潤となるものは、彼が労働者のためにいやす食糧や衣服をおぎなうために交換にあたえざるをえない完成品の割合に、大いに依存する。それは、雇主を年々の事業をはじめるときとおなじ状態におくためにおぎなわれねばならない労働者の生活必需品にたいする完成商品の相対価値に依存するだけでなく、また労働市場の状態にも依存する。……なんとなればもし労働者が稀少ならば、労働者は生活必需品（または雇主の贅沢品とおなじ物をさへ）の多くの量を要求しかつ獲得できるであろう。そしてその結果として、より多くの量の完成商品が賃金の支払にあてられねばならず、そしてもちろんより少量が雇主のために利潤としてのこるのである。かくして、雇主の利潤は二つの事情に依存する。すなわち、第一に生活必需品の完成商品にたいする比較価値に、第二に労働者が彼の立場によって支配できる生活必需品や享樂品の量に、依存するのである。」（*Ibid.*, pp. 365—6）

そこで、リカードの結論はつぎのとおりである。「だからこうおもわれる。すなわち、一日、一カ月、一カ年、または何カ年間に使用されようと、つねに同一量の労働によって生産される商品は、もし諸商品が賃金と利潤とに分割される割合がつねにおなじならば、完全な価値の尺度であるが、しかしその割合は、尺度としてもちいられる商品が生産される時間がより短いかより長いかにしたがつて異なるので、これらの割合の変化から生ずる諸商品の価値の変動についての完全な尺度というものはありえないのである。」（*Ibid.*, p. 404）

ここで注目すべきことは、『原理』第三版で「賃金の騰落」にともない価値法則を变容させる諸要因としてあげられたもののうち、「固定資本と流動資本との割合」および「固定資本の耐久性」の相違などは、この論文では消え失せて、ただ「商品が市場にもたらされるに必要な時間」の相違という要因のみが重視されているということ

である。それは、「商品の相対価値」を規制する「二つの原因」として、「商品を生産するに要する相対的労働量」とともに、「商品が市場にもたらされるまでの時間（またはそれにたいする利潤率）」をあげるところの、一八二〇年のマカロックあての手紙の方向への後退である。⁽⁵⁾しかも、固定資本と流動資本の問題は、もとより資本の回転すなわち流通過程にかかわるものであり、回転時間の相違から生ずる利潤率均等化の契機ではあるが、同時にそれを不変資本・可変資本の区別と混同しているリカードにとつては、「流動資本と固定資本との組合わされる割合の相違」ということは、実は資本の有機的構成の相違——それはいうまでもなく資本の生産過程の問題である——による利潤率の均等化の意味をもになわされていたことをおもうとき、それは明白な理論的後退であるといわねばならない。もつともこの論文では、「商品が市場にもたらされるまでの時間」ということばのかわりに、主として「商品が生産される時間」ということばがつかわれてはいるが、それらはいずれも回転時間の一部としての労働期間ないし生産時間（このばあいには両者は一致する）を意味するものであり、リカード自身もこれらをおなじ意味にもちいているのである。

(5) マカロックあての手紙の方向への後退というのは、この論文においては、「商品が市場へもたらされるまでの時間」は賃金の騰落にともない価値法則を修正する要因とされておき、「時間（またはそれにたいする利潤率）」を直接交換価値を規制する一原因とみなすかのごとき手紙の表現ほど極端ではないからである。

なおマカロックあての手紙の当該箇所はつぎのとおりである。「わたしは商品の相対価値に変化をおよぼす原因が二つあるとおもいます。その一つは商品の生産に要した労働の相対的分量、第二はこのような労働の結果が市場にもたらされうるまでに経過せねばならない相対的時間です。」(2 May 1820, Works, Vol. VIII, p. 180)「わたしはときどきこう考えます。

リカードの絶対価値論について (松田)

もしわたしがわたしの書物のなかの価値にかんする章を書きなおすことがあれば、商品の相対価値は一つの原因によってではなく、二つの原因によって規制されることを、わたしは承認するでしょう。すなわち、問題の商品を生産するのに要する相対的労働量と、資本が活動を停止している時間および商品が市場にもたらされるまでの時間にたいする利潤率とによつて。」(13 June 1820, *ibid.*, p. 194)

この手紙は、リカードの価値論の修正はその労働価値説の放棄を意味するものであり、あとこのこつたものは生産費説にすぎないこと、マーシヤン(A. Marshall, *Principles of Economics*, Appendix 1, *Ricardo's Theory of Value*)、ターン(K. Diehl, *Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung*)らの主張の有力な論拠となつたものであるが、それは、スラップによれば、リカードの気迷いの一時期の産物にすぎないことである。(Works, Vol. I, pp. xxxix-xi)

四

かくしてリカードは、不変の価値尺度なるものが存在しないことをみとめ、可能な最善の尺度をもとめようとする。「そこで、つぎのことがみとめられねばならない。すなわち、完全な価値尺度というようなものはいりえない。」(*Ibid.*, p. 404)「しかし、われわれは完全な価値尺度をもつことはできなくても、労働によって生産された諸尺度の一つは他の尺度よりもよりよいのではないではないだろうか。そしてすべて不完全であるとみとめられた諸尺度のなかから選ぶにあたって、われわれは、労働のみによって生産されたものか、それともある期間たとえば一年間雇用された労働によって生産されたものか、どちらを選ぶべきであらうか。」(*Ibid.*, p. 405)

「わたしには、つぎのことはきわめて明白だともわれる。すなわち、われわれはある期間雇用された労働によつて生産された尺度を、そして資本の前払をつねに想定する尺度を選ぶべきである。というのは、第一に、それは、尺度それ自身と時間のおなじ条件のもとで生産されるすべての商品にたいしては完全な尺度であるからであり、——第二に、交換の対象物である大多数の商品は、資本と労働との結合、すなわちある期間雇用された労働の結合によつて生産されるからであり、第三に、一年間雇用された労働によつて生産された商品は、一方では一年より以上にわたる労働と前払によつて、他方では、なんらの前払なしに一日だけ使用される労働によつて、生産された両極端の諸商品のあいだの中項 (mean) であり、そしてこの中項は、たいていのばあい、もしこの両極端のいずれかが尺度として使用されたばあいよりも、真理から外れることが、はるかにより少いからである。」 (Ibid. p. 405)

それでは、このような「一年間雇用された労働によつて生産された商品」とは、具体的にはなにを意味するか。「穀物が生産されるのと正確におなじ時間に、貨幣が生産されると仮定しよう。その貨幣は、かりにその生産に同一の労働量をつねに必要としたとすると、わたしの提案した尺度であろう。またもしそうでなかったならば、それを獲得するために必要とされる労働の多少の結果として、尺度それ自身の価値の変動にたいしてある斟酌がなされるだろう。日常の消費のもつとも価値ある物品を構成する穀物その他多くの植物性食品とおなじ長さの時間に生産されるこの尺度の条件こそは、わたしに貨幣を選択することを決意させるであろう。」 (Ibid., pp. 405—6)

(6) おなじ思想は、「草稿」のなかでは、マルサスの価値尺度との対照において、つぎのように主張されている。「マルサス

氏が商品の価値の騰落を論ずるとき、彼は小蝦によって、あるいは小蝦が生産されるのとおなじ条件（それはすべて労働によるのであるが）のもとに生産される商品によって、価値を評価する。リカード氏が商品の騰落について論ずるとき、彼は布や金とおなじ条件のもとで生産される商品によって、価値を評価する。そして布および金は、それらを生産するために労働と同様に資本を要し、またつねにそれらのおなじ割合を要するということを想定している。……ここに於いて、労働それ自身が不変であると仮定しているところのマルサス氏の尺度にたいして、わたしは反対する。過剰なあるいは不足している人口のというすべての事情のもとに於いて、また労働の豊富な供給あるいは多量の需要というすべての事情のもとに於いて、マルサス氏の尺度は、労働がおなじ価値であると想定している。労働はいかに過多でありあるいは不足していても、小蝦および労働だけによって生産される他のものと比較すれば、多分おなじ価値であるにちがいない。しかしそれは穀物や衣服や家具や葡萄酒および他の多くのものと比較すれば、非常に変動するであろう。……ここに於いてわたしは、率直に言えば不完全なものであるけれども、一つは尺度を選ぶことをみとめる。……それは一方の極端であるマルサス氏の尺度のようなものではない。またそれはマルサス氏が提案するような労働だけによって生産される商品でもなく、その価値が利潤だけからなりたつ商品でもない。しかしそれはまさしくこれら両極端の間（medium）と考えられるものであり、それは提案しうる他のいかなるものよりも、そのもとで大多数の商品が生産される事情にいつそう近いものとおもわれる。」（*Ibid.* pp. 371—2）云。

(7) 同一の見解は、以前から知られている一八二三年八月のマカロツクあての手紙にもみられる。「価値は二つの要素から合成され、すなわち賃金と利潤とがあらゆる可能な割合でそこに混合しています。それゆえ、あなたの尺度が賃金と利潤との割合に於いて、価値を測定されるその商品と精密に一致していかないかぎり、それを正確に測定しようとする企ては徒勞です。そのなかにひとり賃金のみをふくみ利潤をふくまない商品、これがマルサスの尺度ですが、これはそのなかに労働と利潤との双方をふくむ商品にたいしては正確な尺度となりません。われわれがなしうることのすべては、率直にいえばいずれ

も不完全な尺度のなから、最善の選択をすることであり、もし労働のみによって生産された商品が最大多数をしめるならば、わたしはマルサスの尺度を選ぶことをけつして躊躇しません。しかしその反対が事実なのであつて、商品の大部分は労働と資本との一定期間にわたる結合によつて生産されたものなので、わたしはわたしのした選択を改める余地はありません。わたしはそれを中項だとおもいます。マルサスのものは、物さしの一つの端であり、老いた樫の木は他の極端です。前者には労働以外のものはないにもふくまれません、後者には労働というものはほとんど少しもなく、利潤からする資本の蓄積以外のものはないにもふくんでいません。したがつてこれらのものはともに価値の尺度たるに適しません。」(21 Aug. 18 23, Works, Vol. K. p. 361)

このようにしてリカードは、結局貨幣を、資本と労働との結合によつて生産され、商品が生産される時間にかんして両極端の中項をなすものであると想定することによつて、価値尺度に選択しているのであるが、この思想は彼が『原理』第三版において到達した見地にきわめて近いものであつた。「貨幣を、……同一量の〔資本の〕援助をうけぬ労働の生産物であると、想定」(Works. Vol. I. p. 63)したところの第一版の見解とは異なつて、第三版ではリカードは、つぎのように、「両極端の正しい中項」と想定された金を、価値尺度に選んでいるからである。

すなわち、いう。「たとえば、もしわれわれが金を標準とさだめるとしても、それがすべての他の商品とおなじ事情のもとで獲得され、したがつてそれを生産するのに労働と固定資本とを必要とするところの、一商品にすぎないことはあきらかである。すべての他の商品と同様に労働の節約における改良はその生産にも適用され、したがつてそれを生産する便宜が増大したためにのみ、それは他の物にたいする相対価値において下落するであろう。もしわれわれが、この変動の原因がとりのぞかれ、そして同一量の金を獲得するのに同一量の労働がつねに

必要とされると仮定しても、しかもなお金はそれによってわれわれが正確にすべての他の物の変動をたしかめうる完全な価値の尺度ではありえないだろう。なぜなら、それはすべての他の物と固定資本と流動資本とのまきにおなじ組合せによつても、またはおなじ耐久力をもつ固定資本によつても、生産されないだろうし、またそれが市場にもたらされるまでに、正確におなじ時間を必要ともしないだろうからである。それは、それ自身とまさに同一の事情のもとで生産されるすべての物にたいしては完全な価値の尺度であろうが、しかしその他のものにたいしてはそうではない」。(*Ibid.*, pp. 4—5) 「それならば、金にしても他のいかなる商品にしても、すべての物にたいする完全な価値尺度ではけつてありえない。しかしわたしはすでに、利潤の変動による物の相對価値への影響は比較的輕微であり、もつとも重要な影響は、生産に必要とされた労働量の変動によつてうみだされることを、説明した。したがつてもしわれわれが、この重要な變動原因が金の生産からとりのぞかれたと仮定すれば、われわれはおそらく、理論上考へうる価値の標準尺度にもつとも近いものをもつことになる。金は、大多数の商品の生産にもちいられる平均量にもつとも近いような二種類の資本の割合によつて生産されたところの商品と、考へることはできないだろうか？ 金の資本の割合は、一方はほとんど固定資本がもちいられず、他方はほとんど労働がもちいられないという、二つの極端からほぼ等しい距離にあつて、これらのものの正しい中項 (*just mean*) をなしているのではないだろうか？」(*Ibid.*, pp. 45—6) と。

相異はただ、この最後の論文においては、さきにみたように、賃金の騰落にもなう価値法則修正の要因としての固定資本と流動資本との割合および固定資本の耐久性などが消え失せたことに対応して、すべてが「商品が生産される時間」のタームに翻訳され、「一年間雇用された労働によつて生産された商品」としての貨幣が、

「前払なしに一日だけ使用される労働によつて」および「一年より以上にわたる労働と前払によつて、生産された諸商品」のあいだの「中項」とみなされるにいたつた、という点だけである。そのかぎり残念ながら、「大した進歩がなかつた」というリカード自身のことが正しいといわねばなるまい。

それではこの論文の積極的意義はどこにあるのか。それは、ほかならぬ絶対価値概念の発展、すなわち、商品の価値がその商品の生産に必要な労働量によつて規定されるという思想それ自体を、いつそう明確にし、充分に基礎づけたことにあるとおもわれるが、その問題にはいるまえに、リカードによる、マルサス、トランズ、ミル、マカロックの価値尺度にたいする批判をみておきたい。

五

「マルサス氏は別の尺度を提案する。そして彼は、ある貨幣を海岸での一日の労働によつて拾いあげられるものと仮定する。量のいかんを問わず、そのように均等に拾いあげられるものは、彼によれば、最善であるばかりでなく完全な価値尺度である。たとえば、一日の労働によつて、人がちようど二シリングとよばれる銀をつねに拾いあげることができると仮定すると、一日の労働と二シリングとは価値が等しいであろうし、マルサス氏の判断ではいづれも完全な価値尺度であるだろう。しかしそれが完全な価値尺度でありえないことは、いままでの観察からあきらかでない。」(Works, Vol. IV, p. 406)

右のリカードのことははいくぶん難解であるが、つぎのマルサスあての手紙の一節は、その解説となりうるだろう。「いますべての商品が一日のうちに、労働のみによつて、資本の援助なしに生産されるとしますと、それ

らのものは、その生産に使用された労働の分量が増加したり減少したりするのに比例して変動するでしょう。……こういう事情のもとでは、一日の労働の生産物たる商品は、すべて当然に、一日の労働を支配するでしょう。したがってある商品の価値は、それが支配するところの労働量に比例しているでしょう。……ここに仮定したばあいには、ある分量の小蝦は、おなじ量の労働によって生産されたある分量の貨幣と同様に、正確な価値尺度でありましょう。しかし資本が使用されて、羅紗が労働と資本との生産物であるというときには、あなたが、羅紗は、海岸で労働のみによって拾いあげられるところの小蝦や銀の価値の正確な尺度ではない、といわれるのは正しいですが、海岸で労働のみによって拾いあげられる小蝦や銀は、羅紗の価値の正確な尺度であると考えておられるのは、わたしは、はなはだしい矛盾であると考えざるをえません。」(28 May 1823, Works, Vol. IX, pp. 297—8)

マルサス (Thomas Robert Malthus) は、『経済学原理』(Principles of Political Economy considered with a View to their practical Application) 第一版 (1st. ed. 1820) においては、「穀物と労働との中項」をもって交換価値の標準尺度と考えたのであるが、一八二三年の『価値尺度論』においてはその誤りをみとめて、改めて、商品が支配するところの労働量とその交換価値の標準尺度であると主張するにいたった。すなわちいう。「労働と利潤とのみに分解されるところの商品の交換価値は、その生産に使用された蓄積労働および直接労働に、すべての前払いにたいする利潤の額を労働ではかったものを加えた和からなる労働量によって、正確に測定されるであろう。この労働量は必然的に商品が支配するであろうところの労働量と同一でなければならぬ。」(Malthus, Measure of Value, pp. 15—6) ㄨ。 (『原理』第二版 (一八三六年) においても、この価値尺度論がそのまま踏襲せ

れた。リカードが批判の主な対象としたものが、このマルサスの支配労働価値尺度説であることはいうまでもない。

リカードの批判はつぎのとおりである。「われれわが土地にたいするなんらの追加的労働なしに、それによつて五〇パーセント多い穀物を生産しようなある大きな改善が、農業において発見されたと仮定しよう。わたしの価値評価の方法によれば、労働者に支払われるものとはなんの関係もなしに、穀物は一〇〇対一五〇の比率で下落するだろう。穀物についてのマルサス氏の評価方法によれば、それは、その生産の難易にはぜんぜん依存しないで、労働者に支払われる量にのみ依存する。たとえ諸君が同一の労働で五〇パーセントまたは一〇〇パーセント多くの生産できても、もし労働者が以前とおなじだけ受けとつていならば、彼は、それはおなじ価値であるというであろう。」(Works, Vol. II, pp. 407-8) 「あるひとがわが国の現在の貨幣で、一塊と半分のパンを、彼が以前に一塊買うことができたのとおなじ貨幣と交換に買うことができる、とする。彼がそうすることができるのは、それを生産する容易さが五〇パーセント増したからである。しかもマルサス氏は、もし労働者が同一量の穀物を受けとるならば、穀物が価値において下落したのではなく、貨幣が価値において騰貴したのだ、とわれわれに強いていわせるであろう。」(Ibid, p. 408)

「ある国で流行性の疫病が人口の非常に大きな部分を一掃するほどの程度に蔓延し、その結局、労働の雇用者たちはすべて彼らの労働者たちに、完成商品のはるかに大きな割合をあたえること余儀なくされる、とする。このことは、わたしの価値評価では、財貨の価格にたいしては少しも影響しないであろうが、しかしそれは、労働の価格にたいしては大きな影響をあたえるであろう。賃金は高い、そしてそれはとくに、労働が資本に比較して

稀少だからである、とわたしはいうであらう。マルサス氏はそうはいわない。労働は正確におなじ価値のままであり、そして労働と資本との生産物であるすべての商品が例外なく価値のいちじるしい減少をこうむった、というであらう。——

莫大な数の人びとがアイルランドからこの国へやってきて、彼らの競争で労働の価格を低下させる、とする。マルサス氏は、労働は価値において変化しないが、しかしその生産になんらのあらたな困難も生じなかつたすべての商品が、価値においていちじるしく増加した、と確言するのである。」(Ibid., p. 408)

要するに、支配労働量(実は賃金)を価値尺度とするならば、生産力の変動によつて商品価値が変化しても、賃金が不変であれば、商品価値も不変であるとみなすことになり、また労働にたいする需給の変化にともなつて賃金が騰落すれば、商品価値が不変であつても、それが変動したとみなすことになるから、不合理だという批判である。まことはそのとおりであるが、それではなぜマルサスは支配労働量を価値尺度としたのであらうか。

「しかし、あらゆる商品の供給の条件は、それがついやすよりもより多くの労働を支配するということであつて、それゆえに労働はとくに適切な尺度である、とマルサス氏はいう。それは、いいかえると、前払がなされるところではどこでも、もしそれらの前払だけが回収されて、利潤としてはなにもこらないならば、商品は生産されないであらう、ということである。このことはだれにも否定しない命題ではあるが、それは労働の価値の不変性についていささかの証拠をもあたえはしない。」(Ibid., p. 409) このマルサスの主張は、彼による資本と賃労働との不等価交換の認識、すなわち資本はそれにふくまれてゐる労働量以上の生きてゐる労働と交換され、それによつて利潤が生ずるといふ、剰余価値の源泉にかんする顛倒した把握——それはスミスの支配労働価値説の再

生産にすぎないが、しかもマルクスによって「マルサスの唯一の功績」(Marx, *Theorien*, Bd. III, S. 4)とされたものである——にもとづくものであるが、しかも彼は資本と労働との交換にのみ妥当するこの原則を商品相互間の交換にもおしよほすことによつて、重商主義的な譲渡利潤の観念に逆もどりしているのである。だから、リカードの批判は正当であるといわねばならない。

トランス (Robert Torrens) にたいしては、「草稿」のなかで、つぎのような批判がなされている。トランスは、交換価値を商品一般にたいする購買力と規定し、資本主義社会では、商品の交換価値は、投下労働量によつてではなく、資本支出額によつて決定され、利潤は商品がかかる価値以上に売れることによつて成立する、となしたのである。「トランス大佐は、まったく区別さるべき二つのものを混同することをためらわぬ。——もし羅紗の一片が以前よりもより少い貨幣と交換されるならば、彼は羅紗の価値が下落したであろう。しかし貨幣はより多くの羅紗と交換されるであろうから、彼はまた貨幣の価値は騰貴したであろう。このことは、彼が交換価値だけをあらわすためにもちいるばあいには、正しいであろう。しかし経済学においては、われわれはより以上のなにかを欲する。すなわちわれわれは、その貨幣の購買力における減少が、羅紗を製造するさいのなにか新しい便宜にもとづくかどうか、あるいは貨幣を生産するさいのなにか新しい困難にもとづくかどうか、を知りたいと欲している。わたしにとつては、ある物がその自然価値において増加しながら、しかもそれが以前と正確におなじ条件のもとに生産されつづけているというのは、矛盾のようにおもわれる。⁽⁸⁾トランス大佐自身の理論にしたがつても、それは矛盾である。なぜなら彼は、商品はその生産にもちいられた資本の量に比例して価値がある、というからである。そして、もしより少い資本を羅紗の生産に要するとすれば、羅紗の価値

は下落するであろう。これにはわれわれはみな賛成する。しかし同一量の資本を貨幣の生産に要したのであるから、貨幣の価値が騰貴したというのは、誤りではないだろうか。」(Works, Vol. IV, pp. 374-5)

(8) ここで「自然」ということは、あくらかに「絶対」の同義語としてもちがふところ。 (Meek, Studies in the Labor Theory of Value, p. 112)

「一ヤードの羅紗が五塊の砂糖に値いするとしよう。ところで、羅紗と砂糖とを生産する困難が二倍に増大したとしよう。または、それら二つのものを生産することが二倍容易になったとしよう。これらのいずれのばあいにも、これら二つの商品の相対価値は変化しないであろう。一ヤードの羅紗は、いぜんとして五塊の砂糖に値いするであろう。そしてそれらの相対価値が変らなかつたのであるから、トランズ大佐は、諸君が、それらの真実価値も変らなかつたと、推断するようにみちびくだろう。わたしはそれらの真実価値はたしかに変わったという。一方のばあいには、それらは双方とも、一ヤールの布も五塊の砂糖も、その価値がより少くなる。他方のばあいには、それらはともに価値がより多くなる。」(Ibid, p. 394)

これらの章句のうちに、絶対価値を商品に対象化された労働量によつて規定する、リカードの思想が明瞭に読みとられるであろう。

つぎにジェームズ・ミル (James Mill) にたいしても、「草稿」のなかで、つぎのようにいわれている。「ミル氏は、商品はそれに投じられた (worked up) 労働量にしたがつて価値がある、という。そして、数年間とつておかれる羅紗や葡萄酒は、それに投じられた商人の資本のために、時間にたいしてその価格においてつぐないをしなければならないのであつて、それに投じられた労働量に比例して価値をもつのではない、という反対論が

彼にたいしてなされるとき、彼は、このような反対論は、論争されている原理があまりに厳格に適用されたことをしめすものである、と答える。葡萄酒は、それに投じられた労働量に正確に比例して価値があるのではなくて、その価値は、そのなかに労働が投じられ、そして充分な理由によつて価値尺度に選ばれた商品の価値によつて、調整される。しかしこれは正確には真実ではない。」(Ibid., pp. 375—6)

これは葡萄酒のように、製造されたのも長期貯蔵されることによつて高い価値をもつにいたつた商品の交換価値が、いかにして決定されるかという問題である。これについては、この価値増加は時間の影響によるものであるという見解がある。ミルはそれを否定するために、その追加価値があくまで労働によつて生じたものであることを、強弁した。すなわち、彼によれば、この価値増加は利潤が追加されることによつて生じたものであるが、「利潤は実に労働量の尺度であり、しかも資本のばあいにはわれわれが頼ることのできる唯一の労働量の尺度である。」(Mill, Elements of Political Economy, 1821, p. 99) 利潤は、機械の生産に投じられた労働量によつて決定されるその価格の延払たる、「年賦金」である。しかし労働が生産的になるにつれて、資本の償却をこえる利益がえられ、それが利潤となる。すなわち利潤は、蓄積労働が、直接労働の助けをかりすにつくりだすところの、消費された価値以上の剰余だ、というのである。「かくして、利潤はたんに労働にたいする報酬にすぎない。……すなわち、直接に手によつてではなく、手が生産した用具によつて間接にもちいられた労働の賃金である。」(Ibid., p. 103) 直接労働の大小が賃金によつてはかられるように、間接労働の大小は利潤によつてはかられる。このことは葡萄酒のばあいにも妥当する、というのである。

このようにミルは、利潤を蓄積労働がうみだしたものと考え、それを賃金の一種とみなすことによつて、労働

価値説を歪曲し、リカードが苦心してつくりあげたところの価値修正論をまったく否定してしまつた。リカードは、資本制生産の本質的關係——価値法則——とその現象形態——平均利潤法則——との矛盾に当面して、その解明に苦しみぬいたのに、彼の門弟たるミルやマカロックは、このような矛盾を意識することなく、自己の理論に適合するように現実をねじまげることによつて、労働価値説を危機におとし入れたのである。

最後にマカロック (John Ramsay McCulloch) にたいしては、つぎのようにいわれている。「マカロック氏は異なつた理論をもつている。——彼は、一般的な不変の価値尺度を確定するつもりはない、といつてゐるが、しかし彼の目的とするすべては、それによつて諸商品の相対価値が決定されうる法則をさだめることであり、そしてこれは、彼によれば、諸商品に投じられた労働量に依存するのである。もしある商品が他の商品の価値の二倍であるならば、それは、その商品がそれにもちいられた二倍の量の労働をもつてゐるからである。マカロック氏にたいしては、こういつて反対することができる。これは事実でないようである、すなわち、一〇〇ポンドに値にする樫の木は、それが植えられた最初るときから、おそらくは、五シリングをついやすだけの労働しかそれに使用されていない、一方一〇〇ポンドの価値の別の商品は実際に一〇〇ポンドの価値の労働がそれに投下されたのだ、と。マカロック氏は、こう答える。すなわち、自分は、商品における労働をその生産に実際にもちいられた資本によつて評価するのであつて、……一日使用された五シリングは、利潤が一〇パーセントのときは、一年たつと五シリング六ペンスに等しくなるだろうし、……この資本は第二年目の終りには六シリング二分の一ペンスの資本となり、このようにして年々、諸君が資本のいかなる部分をも使用するのをさしひかえるがために、……時のたつうちに一〇〇ポンドに値いするようになる」と。……事実、一〇〇ポンドで売れる穀物にた

いするほどの実際の労働が木に投下されているのではなくて、その木に支出された五シリングの所有者が、年々その木が足りだす蓄積のいかなる部分をも自分のものにしないうで忍耐することにしたとして、もし諸君がこれを適当に斟酌するならば、等額の資本が事実上、穀物と木に投下されてきている、というわけである。」(Works, Vol. IV, pp. 410—11)

「もし諸君がマカロック氏に、一週間の五二人の労働は五二週間の一人の労働と同量の労働でないかどうかを尋ねるならば、彼は、こう答えるだろう。いや、それはおなじではない、というのは、各週の終りに自分の仕事にたいする利潤を受けるひとは、第二週目には、それでもって仕事をする増加資本をもつ、といったことが毎週おこなわれる。これにたいして、五二週間のあいだなんの利潤をも受けとらないで資本を使用する第二のひとは、こういう継続的蓄積をひとしく受ける資格があり、それゆえに彼の資本は、その利潤によってつくりうるさらに多くの資本を原資本に追加することによって毎週増加資本を実現するひとの資本とおなじ原則でもって、評価されるのである。」(Ibid, p. 411)

「この問題についていくことのできる唯一の疑点は、マカロック氏のもちいる用語の正確性である。——諸商品は、それらの生産費にしたがつて、またはひどい時間それらに使用された資本量にしたがつて、相互の関係で価値をもちうる、というのは正しいかもしれないが、しかし諸商品の相対価値がそれらに投じられた資本量に依存する、というのは正しいとはおもえないのである。〔手稿は(こ)でとぎれてゐる。〕」(Ibid, p. 411—2)

(9) おなじ点のいつそう明瞭な批判が、一八二三年八月二日づけのマカロックあての最後の手紙のなかにみられる。「われわれはともに、二シリングが複利潤率でもって年々蓄積されてゆき、ついに一〇〇ポンドにたつすることをみとめます。ま

た利潤の均等性を保持するためにはそうせねばならないでしょう。しかしわたしは、これらの蓄積された利潤を労働の名でもつてよぶことの妥当性を、そして一〇〇ポンドに値いする商品がそれに投下された労働量に比例した価値をもつとすることの妥当性を疑います。最初労働に二シリングを支出し、のちに一〇〇ポンドの価値をもつにいたった樹木は、厳密にはそれらに使用された労働の価値二シリング以上の価値をけつしてもつものではありません。ひとりの人の五二週間の労働の生産物たる商品は、五二人のひとの一週間の労働の生産物たる他の商品よりも、より多くの価値をもっている、またそうでなくてはならない。そう、あなたはおっしゃる、なぜなら五二週間にわたつて使用された資本は、一週間のあいだ使用された他の資本よりも、労働にたいしてより多くの雇用をあたえるからだ、と。けれども事実上、これらの二つの商品のなかには、ただ相等しい労働量があるだけです。あなたはこの点をこういつて説明なさる、つまりあなたは商品に投下された労働を、資本あるいは商品を生産する要因に投下された労働によつてはかるのだ、と。おもうに、これは、トランズが価値を評価するやり方です。なぜなら、それは事実上、商品はその生産に使用された資本の価値と、その資本がこのように使用された期間とにしたがつて価値があると、いうことになるからです。これは、商品はそれに投じられた労働量にしたがつて価値があるというごとは、別物です。」(Works, Vol. K, p. 359)

この問題は、いうまでもなく、さきにみた葡萄酒の価値決定の問題である。マカロックは、その『経済学原理』初版(一八二五年)において、この問題について、「たとえ五〇ポンドをついやした一樽の新しい葡萄酒を穴蔵においておき、一二月のうちに五五ポンドの価値をもつようになったと仮定しよう。ここに問題は、葡萄酒にあえられた五ポンドの追加価値は、五〇ポンドの価値ある資本が貯えられた時間にたいする報酬と考えられるべきであるか、それとも実際葡萄酒に投じられた追加労働の価値と考えられるべきであるかということである。これは後の観点において考えられるべきである。その理由はつぎのようなものである。すなわち、もし未成

熟の、それにある変化または効果が生じなければならぬところの、一樽の葡萄酒のような商品が保存されるならば、それは一年の終りに追加価値をうるであろう。しかるにもしすでに成熟しており、したがってそれになんらの有益なまたは好ましい変化が生じえないところの、葡萄酒または他の商品を百年間あるいは千年間保存しても、一シリングの価値も増加しないであろう。このことは葡萄酒が穴蔵に保存された期間中にえた追加価値は、時間にたいする報酬あるいは収益ではなくて、そのうえに生じた効果あるいは変化にたいする報酬または収益であるということを決定的に証明するものである。」(MacCulloch, Principles of Political Economy, 1st ed., p. 313—4)と。

このマカロックの見解にたいするリカードの批判は、すでに一八二三年八月の彼あての最後の手紙のなかで、なされていた。「かりに葡萄酒と羅紗とがともにおなじ分量の資本をもちいて一年で生産され、新しく醸造された葡萄酒の一樽と羅紗の一定量とがいずれも五〇ポンドに値すると仮定して下さい。さらに、利潤は毎年五〇パーセントであると仮定して下さい。そうすると醸造後、一年間保存された葡萄酒の一樽は七五ポンドに値し、二年間保存されたそれは一二ポンド一〇シリングに値して下さい。けれども羅紗の一片はつねに五〇ポンドに値して下さい。いまかりに、利潤が五パーセントに下落したとすると、できあがったばかりの羅紗と葡萄酒とは以前とおなじく、それぞれ五〇ポンドの価値をもつています。しかし一年間保存された葡萄酒は五二ポンド一〇シリング、または二年間保存されると、五五ポンド二シリング三ペンスに値して下さい。使用された資本の価値は正確に相等しく、使用された労働量も同様に相等しいのです、そして時間が相等しいのですから、完成商品の価値もまた同様に相等しいのです。商品がこのように利潤の変化のために変動するの

を知るとき、商品の生産に必要な労働量が多いか少いかということ以外には価値変動の他の原因はないと断言するとは、はたして正しいでしょうか。」（Works, Vol. I, p. 362）

このようなりカードの批判やマルサスのはげしい攻撃——『経済学における諸定義』（Definitions in Political Economy, 1827）における——にかんがみて、マカロックは『原理』第二版（一八三〇年）においては、前述の説明を削除して、リカード説に近づいた。そこでは、「自然力の作用もまた労働である」というかつての自己の所論（McCulloch's edition of the Wealth of Nations, note and Dissertations, p. 435）をくつがえして、自然の作用は使用価値の増加にかなするものであつて、その価値にはなにもものをも追加しない、価値は人間の労働によつてのみ生ずるものである、ということが確認された。そして問題の葡萄酒のばあいについては、つきのごとく説くにいたつた。——保存によつて生じた葡萄酒の価値増加は、自然要因の働きによつて生じたものであると論ぜられるけれども、それは誤りである。一樽の葡萄酒は一つの資本であり、葡萄の栽培、醸造等に使用された労働の結果である。しかしさらに葡萄酒の醸酵や熟成の過程に時間をあたえるために、それが完成されるまでそれを貯えておかねばならぬ。葡萄酒がうる追加価値は、この過程をおこなわせるのに必要な資本にたいして生ずる利潤の結果である（Principles, 2nd ed. pp. 353—4）。と。すなわち、新しい葡萄酒は蓄積された労働、すなわち資本であつて、それは一時間の追加労働もなしに古い葡萄酒に転化し、資本に追加される利潤によつて価値を増加する。物的資本だけの生産、そしてそれが価値を増殖する、というわけである。これでは、資本はなぜその消費した以上の剰余を生ずるのか、利潤はなぜ発生するのか、ということとは少しも説明されえない。（岸本誠二郎「労働価値論の研究」一九三二—七ページ参照）

このようにして、労働価値説の危機をまねき、古典経済学の崩壊の一因ともなったところの、このいわゆる「葡萄酒の価値論争」を解決した者は、やはりマルクスであった。この葡萄酒や樹木の価値決定の問題は、実は、リカードがあげた価値修正の四つの要因のうち第四に該当するものであった。すなわち、「資本がその使用者に回収される速度」が相違するばあい、理論的にいえば、「生産過程の継続中における労働過程の中断の結果、流動資本の回転時間」が相違するばあいである。マルクスが『資本論』第二巻第二編第一二、一三章であきらかにしているように、労働期間とは、ある生産部門において生産物を完成するために必要な労働日の合計である。生産時間、すなわち資本が生産過程にある時間は、すべて労働期間ではない。ここで問題なのは、生産物およびその生産そのものの性質からくるところの労働過程の中断であり、その間労働対象は持続的な自然過程に服従し、物理的、化学的または生理学的な諸変化をこうむることになる。そして、この労働期間をこえる生産時間の延長は、資本の回転時間を延長するのである。(Das Kapital, Bd. II, SS. 226—7, 235—6) それは、より多い固定資本とより少い流動資本がもちいらるるばあいや、資本の流通時間が延長されるばあいなどのような、資本の回転時間を延長する他のすべての諸原因と同様に、おなじ大きさの資本にたいしてより小さな利潤率をあたえることとなり、競争的作用によって、それらの相異なる利潤率が平均利潤率に均等化される一契機となるものである。

『剰余価値学説史』第三巻において、マルクスは、ジェームズ・ミルやマカロックの批判に関連して、つぎのうにのべている。「異なった生産領域における諸資本家間の補償理由にかんしては、剰余価値の生産が問題ではなく、種々異なった資本家のあいだにそれが分配されることが問題なのである。……このばあいには、特殊の生産領域における一資本を強制して、他の領域でならばより大きな剰余価値を生産しうるのであろう諸条件を断念

させるところのすべてのものが、補償理由である。たとえば、より多い固定資本とより少い流動資本とがもちられるばあい、資本が流通過程により長く滞留しなければならぬばあい、最後に労働過程に服することなしに生産過程により長く滞留しなければならぬばあい——これはたとえば穴蔵における葡萄酒のように、生産過程がその技術的性質のゆえに中断され、完成しようとする生産物が自然力の作用にさらされねばならぬばあいである——、これらすべてのばあいに……補償がおこなわれる。すなわち、他の領域で生産された剰余価値の一部が労働の直接的搾取に不利な地位にある資本に、資本のたんなる大きさに比例して移転されるのである。（競争がこの均衡をつくりだすのであつて、この均衡のなかでは各特殊の資本は社会的資本のたんなる一可除部分と）してあらわれる。この現象は、利潤と剰余価値との関係を、すすんでは利潤の一般的利潤率への均等化を、理解すればきわめて簡単なものである。しかしこれを、いつさい媒介なしに価値法則から理解しようとするれば、すなわち特殊の一資本が特殊の一事業においてつくる利潤を、それによつて生産された商品にふくまれてゐる剰余価値および不払労働から、したがつてまた商品自体のうちに直接実現された労働から、説明しようとするれば、この問題は……解決不可能となるであろう。」（Marx, *Theorien über den Mehrwert*, Bd. III, SS. 96—97）と。これによつて、リカード以来の難問であり、ミルやマカロックをかくも誤つた道にふみ迷わせた、この問題もついに完全に解決されたのである。

六

以上にみたように、この最後の論文において、リカードは、「商品が生産される時間」にかんして両極端の中

項をなすものと想定された貨幣を価値尺度として選択し、その立場から種々の異説を批判検討しているのであるが、このように最終局面におけるリカードの価値論が、価値尺度の問題をめぐって展開された事実は、あらためてリカード価値論の本質いかんの問題、すなわちそれが価値尺度論であるのか、価値実体論であるのかの問題を、提起するかのようにおもわれる。

周知のように、リカードは、『原理』第一章において、「商品の価値」または「交換価値」は、「その生産に必要な相対的労働量」あるいは「商品についてやされた比較的労働量」に依存し」(Works, Vol. I, p. 11, 12)「労働量は交換価値を「規制し」(Ibid., p. 13)、「決定する。」(Ibid., p. 17)労働は、交換価値の「真の基礎」(Ibid., p. 13)であり、「根源」(Ibid.)であるが、同時にまた「生産についてやされた労働量」は価値の「標準尺度」(Ibid., p. 14)である、とのべている。しかし彼は、なぜ労働が価値の源泉であるということの論拠としては、ただ「すべてのものの真実価格は、それうるための労役と苦心である。……労働はあらゆるものにおいて支払われた最初の価格、すなわち原初的購買貨幣であった。」(Wealth of Nations, pp. 32—3)というアダム・スミスのことばを引用しているだけであつて、それ以上積極的に規定していない。ここから、リカードには価値実体論が欠けており、彼の価値論は価値尺度論にすぎないという議論が生まれてきた。

たとえば、ホランダー(J. H. Hollander, David Ricardo, A Centenary Estimate, 1910)は、リカードの価値論を、終始一貫、「投下労働」を価値尺度とするところの理論とみなし、『原理』第三版において「リカードが第一に目的としたところは……投下労働がもつともちいられうる価値尺度であり、また金がそのもつとも役立つちうる標準的表現であるということをしめすことにあつた。」(山下英夫訳『リカードの研究』一四四ページ)な

どといっている。このことは、リカードは、その修正論によって晩年になるほどその労働価値説を弱めていったという彼の解釈（同書、一四一一—一五〇ページ）と、けつして無関係ではないであろう。

人間労働が価値を形成する実体であるから、その分量はそれみずからの価値の尺度であり、また逆に、労働の分量が価値の尺度たりうるのは、それみずからが価値の実体であるからであつて、価値実体論と価値尺度論とを区別することはまったく無意味であることは、いまさらいうまでもない。そしてリカードのいう価値尺度には、価値の内在的尺度（労働時間）とその外在的尺度、すなわち価値の一般的表現形態——彼が不変の価値尺度の議論において問題にするところのものはこれである——とがあること、彼が価値の実体の究明に十分成功しえなかつたことが、外在的価値尺度（貨幣の本質）の分析に失敗したゆえんであることも、またあきらかである。ここではむしろ、リカードがこの最終論文において、価値尺度の追究の外見のもとに、いかに、絶対価値すなわち価値の実体の把握をふかめていったかを、みることにしたい。

リカードはいう。「わたしが価値ということばによつてなにを意味するのかと、またいかなる標識によつて、一商品がその価値を変えたか変えなかつたかを判断するのかと、問われるかもしれない。わたしは答える。それをうるためになされた労働という犠牲を、のぞいては、物が高価いか安価いか他の標識を、わたしは知らない。すべての物は、本源的には、労働によつて購買される。価値をもつ物は、労働なしには生産されえない。そしてそれゆえに、もし一商品たとえば羅紗が、あるときにそれを生産するのに一年間にわたつて一〇人の労働を要したのに、他のときにはそれを生産するのに、おなじ期間にわたつて五人の労働のみを要するとすれば、それは二倍安価になるだろう。あるいは、同量の羅紗を生産するためにいぜんとして一〇人の労働を要するが、しかし一

二カ月ではなくて六カ月しかかからないとすれば、羅紗は価値において下落するだろう。

商品に投じられた労働量が多いか少いかということだけが、それらの価値における変化の唯一の原因でありうるということは、われわれが、すべての商品が労働の生産物であり、それらについてやされた労働のほかに価値をもたない、ということに同意するや否や、完全に証明される。」(Works, Vol. IV, p. 397. 傍点引用者)

右の傍点を附した箇所において、リカードが、人間労働がなぜ価値の「原因」であるかという理由を、自分のことばで語つていることがみられるであろう。それはまさしく価値の実体概念にほかならない。たしかにここでさえも、その価値をつくる場所の労働の性質はついにあきらかにされていぬ。リカードは、価値の実体を探究してここまで到達した。しかしそれ以上にすすむことは、すなわち抽象的・人間的労働の観念を把握することは、ついにできなかつたのだ。彼の価値論の根本的欠陥はここにあり、彼が価値を交換価値たらしめ、商品と貨幣との内面的連繫をあきらかにするところの価値形態の分析に成功しえなかつたのも、また彼がいわゆる価値論の修正によつて労働価値説をわずかながら生産費説と妥協させるにいたつたのも、すべてここに原因する。しかし、リカードにおける抽象的・人間的労働の観念の欠如は、彼が資本制生産を「生産の絶対的形態」(Marx, Theorien, Bd. III, S. 54) なし「永遠の自然形態」(Das Kapital, Bd. I, S. 86) と見誤つたことにもとづくものであつて、ブルジョア経済学にとつては、ついにこえることのできない一線であつたとおもわれる。

それにもかかわらず、「絶対価値と交換価値」がリカード経済学の発展にたいしてもつ意義は、リカードが労働価値説を放棄したとか、またはそれを弱めていったとか、あるいは、彼には価値尺度論があるだけで価値実体論はないとかいうたぐいの、学問の名において馬を鹿とよぶようないつさいの議論を、事実によつて粉碎したと

ころにあるだろう。リーカドは、まさに、マルクスへとつづくところの科学的経済学の大道に立っていたのだ。「わたしはただわたしの使命のうちに苦しみつけ、経済学のもっとも困難な問題を理解しようところをみます。」（*Letter to Malthus*, 3 Aug. 1823, *Works*, Vol. IV, p. 325）と、その最後の手紙の一つで語っていたリカードが、この最終論文を中断してからわずか一週間後に、はげしい苦痛をともなった脳の腫物に仆れたことは、まことに悲劇的ではあるが、ブルジョアジーの生んだこの最高の経済学者の榮譽ではないだろうか。